O1-012

発達障害児の早期療育に関する長期予後調査から見た発達障害児と健常児のQOLの比較

古藤 雄大[1]、新澤 伸子[2]、伊丹 昌一[3]、永井 利三郎[4]

[1]大阪母子医療センター 看護部
[2]武庫川女子大学文学部　心理・社会福祉学科
[3]梅花女子大学心理こども学部　心理学科
[4]プール学院大学教育学部　教育学科

【目的】
発達障害児療育拠点で行われてきた自閉スペクトラム症児を中心とした発達障害児への療育及び親支援プログラムの効果検証として長期予後調査を行った。その中で、KINDL[R]を使用して発達障害児自身と親から見たQOLについても調査した。今回はその結果を俯瞰すると共に、療育拠点における支援プログラムを修了した発達障害児の長期予後を明らかにするため、健常児の基礎データと比較を行った。
【方法】
発達障害児療育拠点において2008年から2010年の間に支援を受けた846名を対象として自記式質問紙による横断的調査を行った。調査は研究への同意を求める1次調査と質問紙を配布する2次調査を実施した。質問紙は対象児の背景とKINDL[R]を含めた複数の質問紙尺度で構成された。KINDL[R]は子ども用として対象児の年齢に合わせて小学生版もしくは中学生版に回答を求め、保護者から見た対象児のQOLについて親用に回答を求めた。1次調査の返信者258名のうち、研究の同意が得られた214名に対し、質問紙の送付を行った。質問紙の配布と回収は郵送にて実施した。本研究は武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科の倫理委員会の承認を受けて実施した。
【結果】
回収した質問紙は166通、有効回答は163通であった。対象児の平均年齢は13.6歳で、男性129名であった。発達障害等の診断名は、自閉症スペクトラム88名、広汎性発達障害82名、知的障害54名などであった。KINDL[R]親用は135名、子ども用は93名の有効回答があった。親用総得点は平均64.3（±11.71）点であり、子ども用QOLでは平均66.6（±13.44）点であった。Cronbachのαは親用総得点では0.868、子ども用では0.838であった。日本の健常な中学生群のデータ（n=2306）を用いて、対応のないt検定を用いて比較した。その結果、「身体的健康」「自尊感情」「家族」「学校生活」「総得点」では対象児のQOLが有意に高く、「友だち」では有意に低かった。
【考察】
KINDL[R]は子ども自身が回答しQOLを数値として検討できる点が優れてり、良好な信頼性が確認された。健常児と比較して下位尺度で対象児のQOLが高い傾向であったことは、幼児期の療育の経験の他、様々な支援を受けてきた結果であると考えられる。「友だち」が低い点数であったことは、障害特性から来るものであり、家族との関係や学校生活全般のQOLをあげること、自尊心が低下しないような支援を行うことによって、全体的なQOLを高めることができると考える。

O1-013

親子支援グループでの発達障がい児における運動面の検討-2

梶 瑞佳、小林 晴香、東 由佳、橋本 直子、小柴 ゆかり、芦見 真知、中野 加奈子、太田 國隆

六甲アイランド甲南病院 小児科

【はじめに】
当院では2009年度から就学前の発達障がい児とその保護者を対象に親子支援グループ「いるかくらぶ / くじらくらぶ」を実施している。「いるかくらぶ」は3-4歳児、「くじらくらぶ」は4-6歳児を対象に、集団での遊びを通して社会的スキルとコミュニケーション力の向上、保護者のサポートを目的に、いずれも月2回、1回1時間、全10回/半年を1クールとしている。
【目的】
発達障がい児は、体の使い方がぎこちなく運動が苦手であることが多い。運動は児のさまざまな発達の根幹であるとの考えから、第63回小児保健学術集会では、親子支援グループ参加児の粗大運動について検討した。今回は、主に他者や物との距離感、身体部位の認知、動作模倣に焦点を当て、グループ参加児の変化を評価し、今後のプログラムに生かすことを目的とした。
【対象および方法】
対象：2017年度に親子支援グループに参加した発達障がい児12名（男児11名、女児1名）。年齢は3歳～6歳。方法:「他者や物との距離感」「身体部位の認知」「動作模倣」について、各々4つの観察項目を設け、0～2点の3段階評価とした。2017年度前期・後期各クールの初回・中間・最終回に臨床心理士・言語聴覚士・小児科医師が評価した。
【結果】
期間中にもっとも評価が上がったのは「身体部位の認知」であった。観察項目としては、≪的確に自分の体の部位を触れることができる≫と≪足踏みで膝を高く上げる≫において半数の児で点数が上がった。次に評価が上がったのは「動作模倣」であった。観察項目としては、≪手遊び模倣≫では半数の児で、≪体操模倣≫と≪ふらつかずに止まる≫では1/3の児で、それぞれ点数が上がった。評価が上がりにくかったのは「他者や物との距離感」であった。観察項目としては、≪他児との間隔をあけて並ぶ≫では全例で点数が上がらなかった。
【考察】
親子支援グループでは、触覚、聴覚、視覚的に分かりやすく刺激を与えるためにオリジナルの補助具を考案作成し使用している。また、スタッフは積極的に児に触れながら動作の補助をしている。このように感覚刺激を強く与えることにより、短期間で「身体部位の認知」の発達を促すことができたが、「他者や物との距離感」の発達を促すことにはつながらなかった。今後は、より多くの参加児で評価が上がること、今回評価が上がりにくかった項目での発達を促すことを目標に、プログラム作りをしていきたい。

Presented by Medical*Online